



## 物理チャレンジ2007 ジャーナル

# レゾナンス 第1号(7月30日発行)

物理チャレンジ・オリンピック日本委員会  
広報委員会



# 98名のチャレンジャーが集合



2007年7月29日、物理チャレンジ2007が幕を開けた。開会式・公開講演会の会場は、つくば国際会議場。緊張して受付をすませホールに入る物理チャレンジ初参加の生徒をよそに、リピーターの生徒ははじめから和気あいあい。彼らはなぜこんなにも和気あいあいなのか？ 初参加の生徒は、もうその理由を感じ始めているはずだ。そう、普段の生活ではめったに見つけることのできない本気で切磋琢磨できる人間が、この物理チャレンジに集まっているのだ！

# 開幕の挨拶



北原日本委員会委員長から、これまでの物理オリンピックの説明があった。昨年のシンガポール大会は銀1と銅3、今年のイラン大会では金2、銀2、銅1のメダルを獲得。このペースでいったら、来年のベトナム大会は一体どうなってしまうのか！？君たちの活躍が大いに期待される場所である。しかし、物理オリンピックは単なる競争の場ではない。大会での国際交流が君たちの財産になることはもちろん、君たちの交流が生む友情は世界の財産になっていく。心に白地図をもって、いざ、物理チャレンジ！そして、北原委員長は高らかに開会を宣言した。

# 来賓ご挨拶



筑波大学の岩崎学長のご挨拶では、筑波大学(東京文理科大学、東京教育大学)と朝永振一郎博士、白川英樹博士、江崎玲於奈博士の関係が紹介された。その記録は、フィジックス・ライブが行われる総合B棟のギャラリーに展示されている。ぜひ見に行ってください。

# 来賓ご挨拶



稲葉茨城県教育委員会教育長は、仁科芳雄博士ゆかりの地、岡山で行われたこれまでの物理チャレンジに言及しながら、今回の場所、研究学園都市つくばを大いにアピールした。J-PARC、JAXA、産総研、KEKには、明日以降に見学することになる。

# 国際物理オリンピック2007の報告



杉山オリンピック派遣委員から、イランはイスファハンで開かれた国際物理オリンピック2007の報告があった。日本代表決定からオリンピック参加までの充実したトレーニングの後、結団式を経て、代表はイランに向けて出発した。北原委員長の話にもあった白地図での国際交流、VIP待遇を受けの一団、理論問題と実験問題にチャレンジする代表の様子などが紹介された。杉山先生の報告は、君たちのチャレンジ精神を大いに刺激したことだろう。だが、挑戦者たちよ、忘れるなかれ。君たちのチャレンジの陰で、徹夜で問題の翻訳をする先生たちの努力があるのだ。

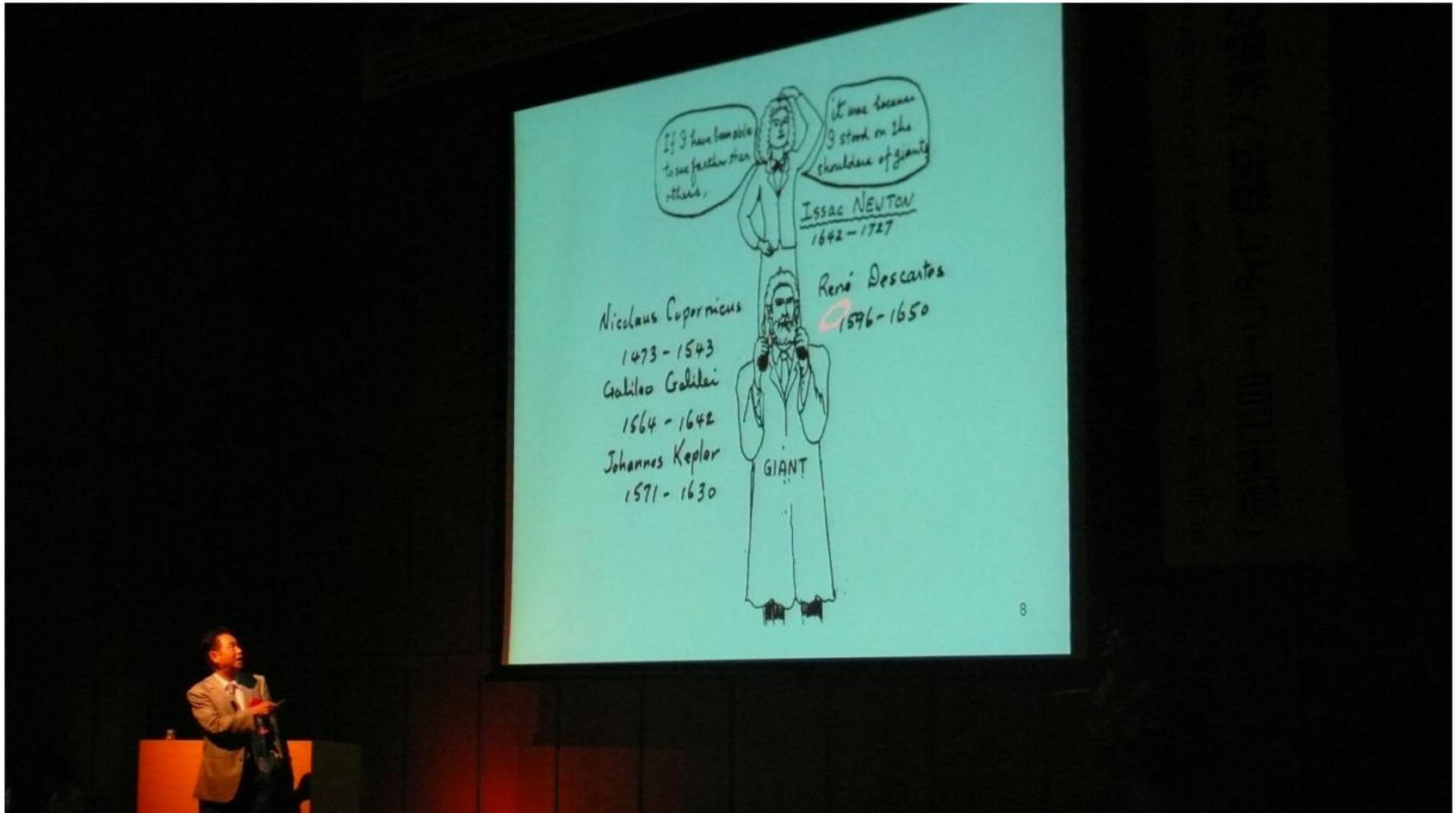
# 自分の限界に挑戦しようー自己実現



江崎先生から、「自分の限界に挑戦しようー自己実現」というタイトルの講演があった。

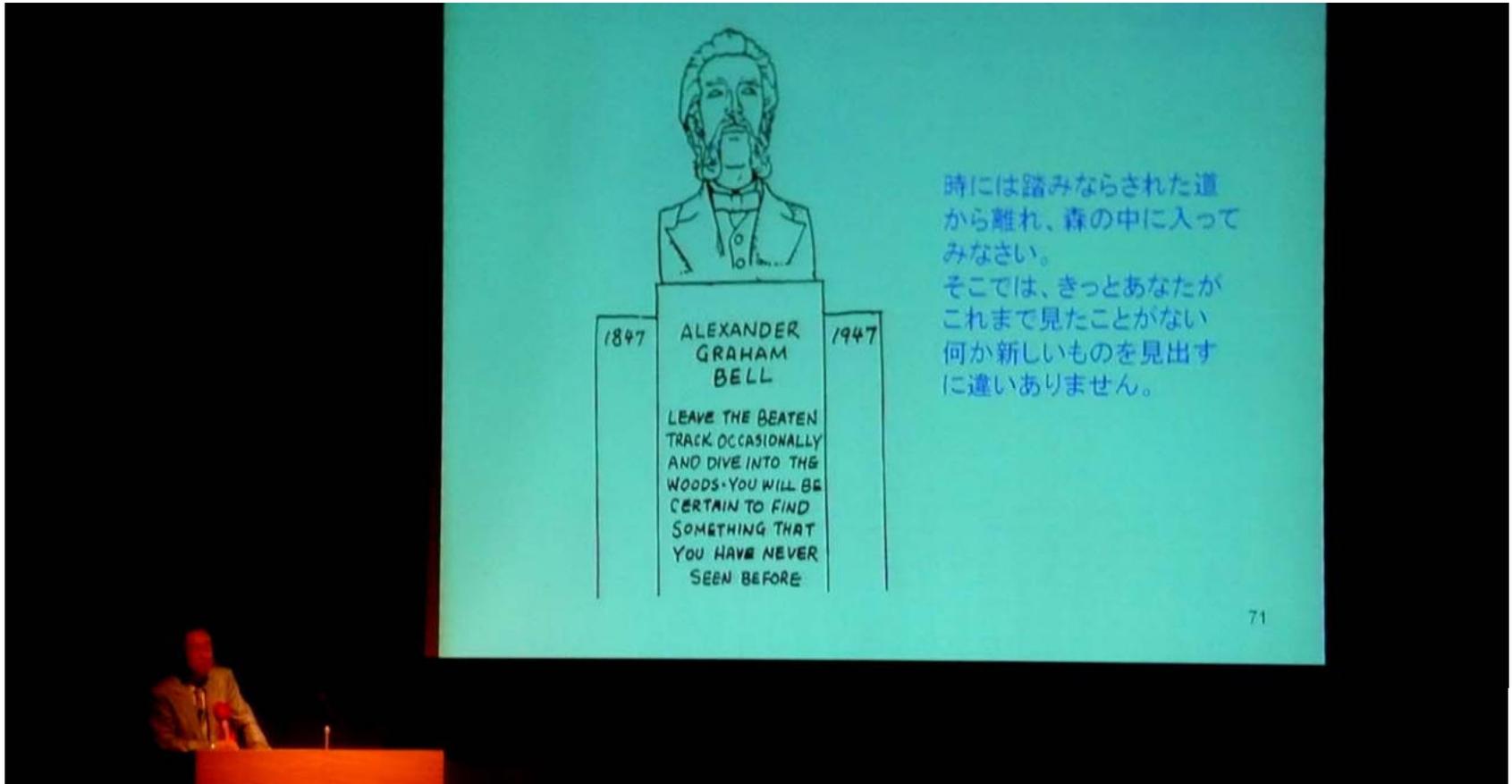
近代科学に対するデカルトの貢献のお話は、彼を(文系的な)哲学者だと思っていた諸君にとっては、とても新鮮なお話だったのではないだろうか。ニュートンのように、「巨人の肩」に頼りながらも、自分の創造能力の限界に挑戦してきた人たちの存在、バーディーンとブラッテン、ショックレーによる半導体トランジスタの発明、ワトソンとクリックのDNA発見など、江崎先生のお話は、どれもサイエンティストとしての限界へ挑戦してきた人々の例だ。そこでは、専門性と学際性、他律性と自立性のバランスを取る工夫など、具体的なアドバイスもなされた。

# Isaac Newton の言葉



If I had seen further it is by standing on the shoulders of Giants.  
(Isaac Newton)

# Graham Bell の言葉



Leave the beaten track behind occasionally and drive into the wood.  
You will be certain to find something that you have never seen before.

(Alexander Graham Bell)

# 歓迎アトラクションその1



筑波山がまの油売り口上研究会 村竹儀昭さん

いただいた「がまの油」の効能やいかに！

ところで、誰か本気で一万円札増やそうとしてませんか？

# 歓迎アトラクションその2



龍宮城の乙姫のごときダンス、ミッキーとパワーレンジャーが伝統ですから、底力が違いました。

# 歓迎アトラクションその3



太鼓の音が響いたのは、空きっ腹だったからではありませんよね。音がとっても力強かったですね。

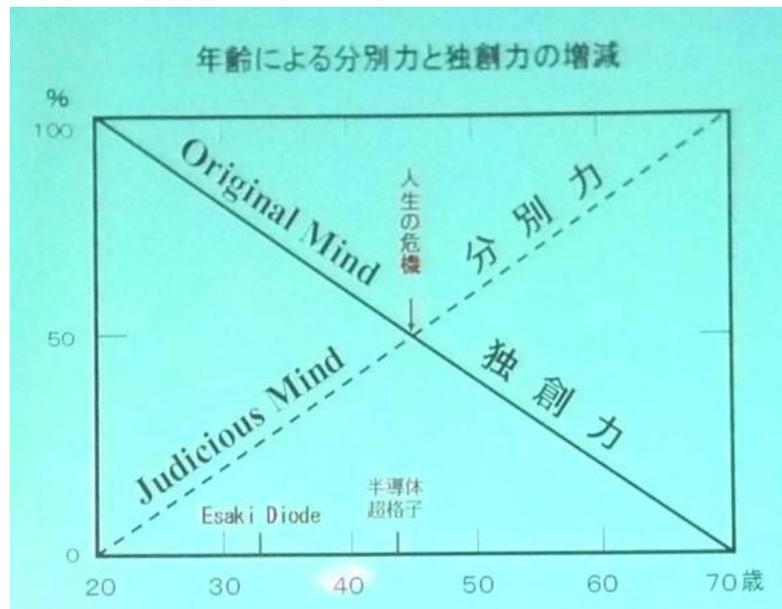
# Waldemar Gorzkowski博士死去



1970年から国際物理オリンピック委員会会長の任にあった、ポーランド出身のゴルツコフスキー博士は、物理オリンピック・イラン大会の最中、天に召される。

In Waldemar we lost a great promoter of high level of physics education and wonderful friend. ( IPhOゴルツコフスキー博士追悼文より)

# 編集後記



## 10代だけが持つ「特権」

江崎先生の講演で、「独創力」と「分別力」の曲線が交わるグラフを見て、指導にあたる先生たちは一様に苦笑を禁じ得なかったようだが、物理チャレンジに参加する生徒諸君は、大いに勇気づけられたかのではないか。

このグラフには描かれていないが、この独創力が伸びる時期は10代である、というのが江崎説である。

今年の1月1日付け日本経済新聞「私の履歴書(第1回)」では、  
「私はかなり激動のティーンズを過ごしたが、多分、これが私の人間形成にかなりの影響を与えたのであろう。全く親に依存する子供から、自主自律の大人になる間のティーンズをどう生きたか。この時期に、どれだけ、もって生まれたタレントを見だし、その潜在能力を引き出すことができたか。どれだけ創造能力を獲得し得たか、などが将来の活躍に決定的に影響を持つのである。」と述べている。

**独創力を鍛えられるのは10代(のみ)。ちょうど、今のあなた方である。**

このメカニズムは、現代の脳科学にあっても未だ明らかにされていないが、経験的には知られている事実である。そして、そのチャンスは二度とめぐってこない。



物理チャレンジ2007 ジャーナル

レゾナンス 第2号(7月31日発行)

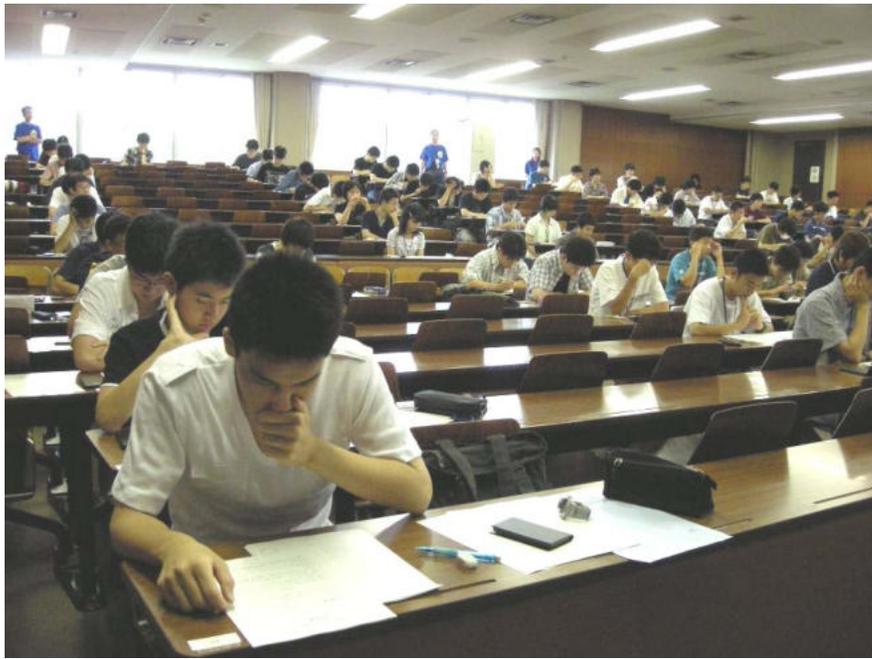
物理チャレンジ・オリンピック日本委員会  
広報委員会



# 理論問題にチャレンジ！



最初のチャレンジは、理論問題。会場となった1H棟には、すでに問題用紙や電卓が整然と並べられている。限界を超えて長時間にわたり集中力を持続する生徒たちには、天然水とカロリーメイトの差し入れも。緊張で乾く喉は潤され、オーバーヒートしかけるブレインには糖分が補給された。5時間にも及ぶチャレンジには、集中力の維持や、自分の頭をリフレッシュする工夫も必要だ。物理チャレンジは、自分の限界への挑戦でもある。





理論問題チャレンジ開始ギリギリの時間まで、問題について議論する先生たち。おやつや水の準備をするスタッフたち。熱意をもってまったくのボランティアで参加している茨城県の職員や高校の先生たち。  
生徒たちのチャレンジは、多くのひとびとによって支えられている。



先生たちにとって採点作業とは、解答に期待を抱かせるものである一方、正確性、公平性を期して、複数の目を通すなど、極度の緊張を強いられるしごとである。午後からスタートし、夜遅くまで続けられた。



# 窓の外では、激しく打ちつける雨...



朝の天気予報では降水確率1%。しかし、スコールのような雨は、1H棟の前の駐輪場の屋根に水煙を立てる。やむを得ず、全体写真の撮影は、1H棟のチャレンジ会場で。しかし、健闘した生徒たちを祝福するかのよう、昼食後に、空は晴れ渡り、エキスポセンターから帰ってきた生徒たちは、図書館わきで改めて全体写真を撮ることができた。



滴

急いでバスに乗り込む生徒たち(左)  
つくばエキスポセンターのプラネタリウムは世界最大級(右上)  
闇の中で星空を楽しむ(左下)



長時間のチャレンジと昼食の後に訪問したエキスポセンターでは、眠気と知的好奇心がせめぎあったことだろう。しかし、もちろん勝ったのは知的好奇心に違いない、とスタッフは信じている。

# フィジックス・ライブ ～見つめるまなざし～



知的好奇心にあふれる眼で顕微鏡をのぞく(左)  
ぐいぐい迫る「江尻節」が炸裂する！(右上)  
プレゼンテーションに聞きいる生徒たち(右下)



プラズマに触れる！ 鬼気迫るほどに真剣なまなざしを見よ(上)  
質問もさすがに鋭い(左下)



霧箱を使った実験の紹介(右上)  
圧倒的大人気だったDr.ナダレンジャー(右下)





永谷先生の説明に熱が入る。(左)

国際物理オリンピックのDVD放映のために、  
去年の物理オリンピックの代表たちが駆けつけてくれた。(上)



生徒の興味はそれぞれ違うが、そのいずれにも対応するほどの多彩なプログラムが展開された。

出店(でみせ、それとも出展?)、屋台と題されたエキシビジョンでは、江尻先生と永谷先生による「第8回アジア物理オリンピックの実験問題その1とその2」の再現と解説、野村先生による「ナノ構造の量子デバイス」、高妻先生による「レーザー光でみる生命現象」、興治先生による「霧箱実験で見る素粒子の世界」、高橋先生による「光の性質と原子分子」、産総研の越崎研究員と清水研究員による「大気中で発生させる小さなプラズマ」、KEKの野崎先生による「高校生にもできる素粒子探索」、防災科学技術研究所の納口研究員による「Dr.ナダレンジャー実験教室」。

プレゼンテーションは、鈴木先生、杉山先生、田中先生による「国際物理オリンピック2007問題解説」、国際物理オリンピック2006日本代表の田中君、谷崎君、野添君、疋田君による「国際物理オリンピック2006のDVD放映」、KEKの「高エネルギー加速器研究機構のDVD放映」、グループリーダーを務める筑波の大学院生による「大学院生によるプレゼンテーション」。

見学ツアーは、梅村先生による「計算科学研究センター見学ツアー」、長先生による「プラズマ研究センター見学ツアー」、開会式の学長挨拶にもあった朝永振一郎博士、江崎玲於奈博士、白川英樹博士を記念展示した「筑波大学ギャラリー見学ツアー」。「Belle実験で使われている測定器」も展示・解説された。

屋台では、特に防災科学技術研究所のエキシビジョンに人だかりができていた。**大学の先生とは違って(!?)** さすがに各研究所のエキシビジョンは手慣れたものだ。

もちろん、他のエキシビジョンにも多くの生徒が集まった。このようなエキシビジョンでは、参加者の反応が単なる驚きに終始することが多いが、フィジックス・ライブに参加した生徒たちの驚きは、単なる驚きではなかった。彼らの好奇心は、驚きの後に必要となる「なぜ？」を問うための知識に裏打ちされた、まったき「知的好奇心」なのだ。「巨人の肩」に乗ることは、遠くを見通すことを可能にするだけでなく、驚きそのものの奥行きも広げるのだらう。生徒たちのするどい質問に、研究者たちも驚きを隠せなかった様子だ(驚きにも、いろいろな種類があるものだ)。

また、生徒たちとプロの研究者との交流の意義は、決して物理学の知識だけに還元されるわけではなかった。

プロの研究者から初めてもらった名刺を眺め、大事そうにしまう生徒の姿に、スローガンとして人口に膾炙した「夢」や「憧れ」のもつ力を再確認することができた。

参加した生徒たちのまなざしは真剣そのものだった。

# 楽しい食事の時間

筑波大学で一番おいしいと評判の第二食堂。  
それもそのはず、ヒゲのコック長さんはここで働いて20年の大ベテラン。  
生徒もスタッフも一斉に食堂へ向かったため、食堂内は大混雑。  
こうなったら、4種類用意されたメニューは早いもの勝ち！  
行列の最後尾についたひとには、天井セットが品切れになって残念でした。



高校生の活躍を見て、遅ればせながら、ようやくマスコミも注目し始めた。

**科学五輪**

「物理オリンピックで日本の高校生2人が初の金メダル」「生物で銀」「化学では銅」――。

そんな成績が世界各地から届く。高校生による科学オリンピックである。

今年の大会は今月半ばから来月にかけて、イラン、ロシア、カナダなどで、科目ごとに開かれている。日本が参加するのは、すでに終わった物理学、生物学、化学に加え、数学と情報の計5科目だ。

全国から選ばれた23人の高校生が世界に挑んでいる。各国の高校生と競う一方で、友情を深める。こんな経験は大きな財産になるに違いない。

科学五輪は科目ごとに歴史も異なり、参加国の数も様々だ。最も古い数学は1959年に始まり、昨年は90カ国が参加した。一方、一番遅く90年に始まった生物は昨年の参加が47カ国だった。

日本は数学には90年から参加しているが、ほかの科目は、やっとこの数年のことだ。物理学は昨年が初参加だった。

**高校生よ、世界に挑もう**

出される問題は知識だけでなく、分野の深い理解を求めているものが多い。科目によっては実験もある。たとえば生物学の場合、理論に5時間、実験をしながら解く問題に5時間が当てられる。

成績の上位1割に金、2割に銀、3割に銅のメダルが贈られる。日本は昨年、23人が参加し、5人が金メダル、7人が銀メダルと善戦した。

だが、中国はもっとすごい。昨年、参加した23人全員が金メダルを手にした。10万人以上の中から選ばれた選手が長期間の特訓を受けたからだ。成績の上位には、韓国、ロシア、台湾なども並ぶ。

むしろ、単にメダルを取ればいいというものではない。日本で気になるのは、世界の舞台に挑もうという高校生が少なく、層が薄いことだ。その背景には子どもたちの理科離れがあり、科学好きのそ野が狭いことがあるだろう。

もっと多くの高校生が科学五輪に挑むことで、科学の魅力に触れるきっかけに

「金2」「銀4」全員メダル

【ハノイ共同】世界中の中高校生が数学の難問に挑戦する第48回国際数学オリンピックがベトナムの首都ハノイで24日から開催され、日本代表は2人が金メダル、4人が銀メダルと参加者6人全員がメダルを獲得、国別で6位となり過去最高の成績を取めた。主催者側が9日、明らかにした。表彰式は30日に行われる。

金メダルを獲得したのは高田高(津市)3年の片岡俊基さん(17)と筑波大付属駒場高(東京都)1年の副島真真さん(16)。片岡さんは中学3年の時から、銀、金、銀、金と4年連続のメダル受賞。銀メダルは瀬高(神戸市)2年の関典史さん(17)、同校3年の吉田雄紀さん(18)、大教大付属から、銀、金、銀、金と4年連続のメダル受賞。成績順に金メダルは約8%、銀、銅メダルはそれぞれ約12%、約25%を目安に授与される。

主催者によると、国別では1位がロシアで、2位中国、3位ベトナム、韓国、5位米国、6位日本、ウクライナと続いた。日本は昨年の7位がこれまでの最高だった。今年は93カ国・地域から5225人が2日間の筆記試験に挑戦。制限時間9時間で計6問の成績を競った。成績順に金メダルは約8%、銀、銅メダルはそれぞれ約12%、約25%を目安に授与される。

高天寺校舎(大阪市)3年の井上卓也さん(17)、筑波大付属駒場高1年の滝間太基さん(16)。

主権者によると、国別では1位がロシアで、2位中国、3位ベトナム、韓国、5位米国、6位日本、ウクライナと続いた。日本は昨年の7位がこれまでの最高だった。今年は93カ国・地域から5225人が2日間の筆記試験に挑戦。制限時間9時間で計6問の成績を競った。成績順に金メダルは約8%、銀、銅メダルはそれぞれ約12%、約25%を目安に授与される。

赤潮対策として水酸化マグネシウムを使用し、産卵の数を減らす影響も、

(2007・7・28)

**朝日新聞 2007年7月28日**

産経新聞 2007年7月30日

**日本、過去最高6位**

**数学オリンピック**

「金2」「銀4」全員メダル

【ハノイ共同】世界中の中高校生が数学の難問に挑戦する第48回国際数学オリンピックがベトナムの首都ハノイで24日から開催され、日本代表は2人が金メダル、4人が銀メダルと参加者6人全員がメダルを獲得、国別で6位となり過去最高の成績を取めた。主催者側が9日、明らかにした。表彰式は30日に行われる。

金メダルを獲得したのは高田高(津市)3年の片岡俊基さん(17)と筑波大付属駒場高(東京都)1年の副島真真さん(16)。片岡さんは中学3年の時から、銀、金、銀、金と4年連続のメダル受賞。銀メダルは瀬高(神戸市)2年の関典史さん(17)、同校3年の吉田雄紀さん(18)、大教大付属から、銀、金、銀、金と4年連続のメダル受賞。成績順に金メダルは約8%、銀、銅メダルはそれぞれ約12%、約25%を目安に授与される。

主催者によると、国別では1位がロシアで、2位中国、3位ベトナム、韓国、5位米国、6位日本、ウクライナと続いた。日本は昨年の7位がこれまでの最高だった。今年は93カ国・地域から5225人が2日間の筆記試験に挑戦。制限時間9時間で計6問の成績を競った。成績順に金メダルは約8%、銀、銅メダルはそれぞれ約12%、約25%を目安に授与される。

高天寺校舎(大阪市)3年の井上卓也さん(17)、筑波大付属駒場高1年の滝間太基さん(16)。

主権者によると、国別では1位がロシアで、2位中国、3位ベトナム、韓国、5位米国、6位日本、ウクライナと続いた。日本は昨年の7位がこれまでの最高だった。今年は93カ国・地域から5225人が2日間の筆記試験に挑戦。制限時間9時間で計6問の成績を競った。成績順に金メダルは約8%、銀、銅メダルはそれぞれ約12%、約25%を目安に授与される。

赤潮対策として水酸化マグネシウムを使用し、産卵の数を減らす影響も、

# 編集後記



亥年の選挙は荒れるとのジンクスがある。これは似非ではない。政治日程がきついのだ。「物理チャレンジ」の最中、今回も予想を上回る自民党の敗北が報じられた。まさに「アバランシ現象」である。

私たちの心配は、政局激動が教育(改革)に及ぼす影響である。

開国・近代化、戦後という2度の危機にあって日本を支えたのは、日本人の勤勉性と教育にあった。教育に対する投資が、10年後にリターンとしての所得増加をもたらしたのだ。

いま、日本は3度目の重要な時期を迎えている。「知の世紀」における10年後の浮沈がかかっている。財源を工面して、教育投資を効果的に拡大してほしいものである。

「物理チャレンジ」は、10代という最も効果的な時期への投資であるといってよい。自分で伸びようとする若者たちを周りで支援する。これを禅のことばでは「**啐啄同時**」(そったくどうじ)という。



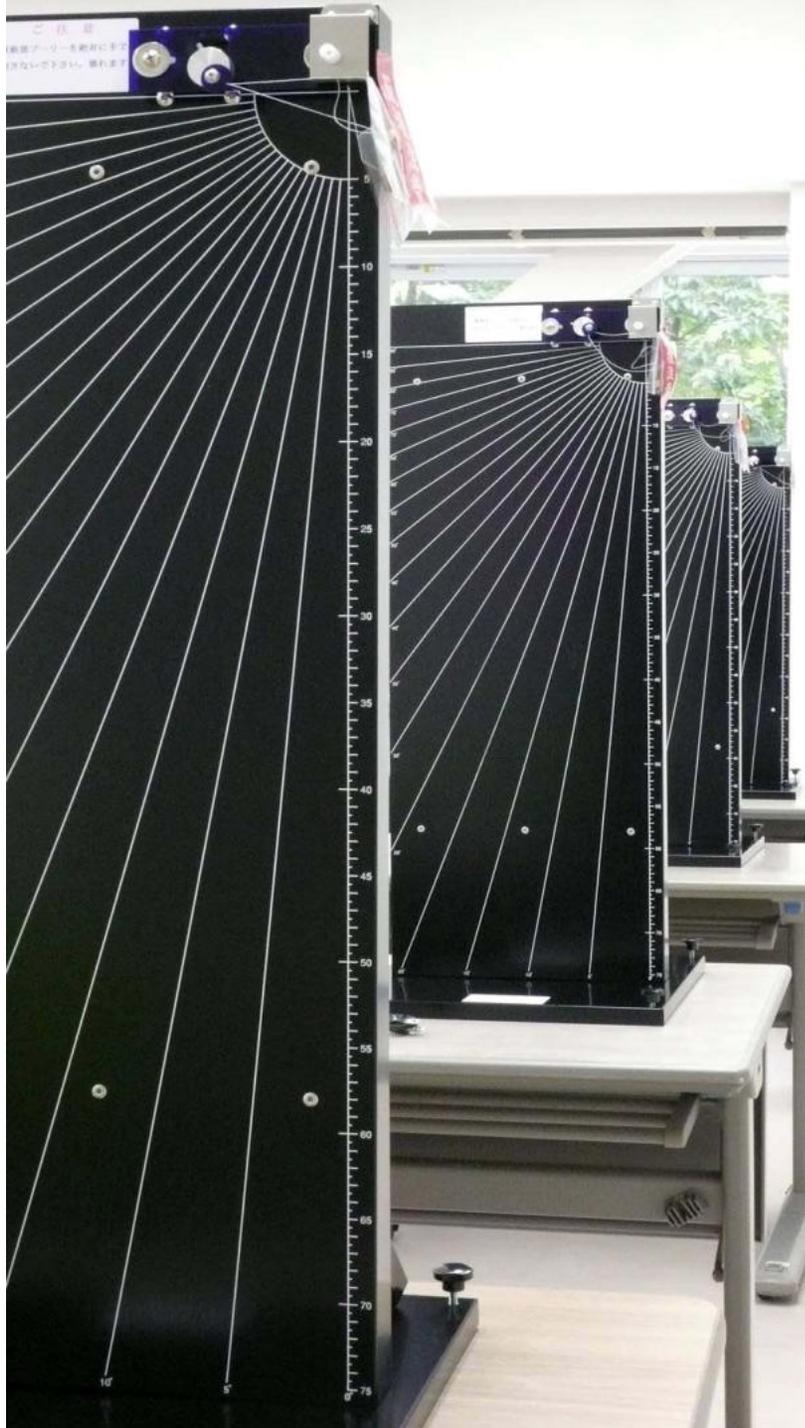
## 物理チャレンジ2007 ジャーナル

# レゾナンス 第3号(8月1日発行)

物理チャレンジ・オリンピック日本委員会  
広報委員会



# 実験問題



講義室  
Lecture Room

1E203

 物理チャレンジ2007

**実験問題会場**

会場: 1E203



物理チャレンジは後半に。残るチャレンジは実験問題だ。チャレンジ時間は理論問題と同じ5時間。しかし、生徒にとって時間の感じ方は理論問題の時とはまったく違っていたはずだ。時間ごとの手つき顔つきの変化がそれを物語っている。はじめの頃は新しいおもちゃを与えられた子供のように嬉々としていた生徒の顔が、刻一刻とチャレンジ時間が過ぎるにしたがって緊張していくのだが、その緊張の顔つきはまるで職人のそれだった。



頭だけでなく手を動かさなければならないから、  
という説明ではこの違いは伝わりにくいだろう。  
実験の妙は、想像力と現実との対応に、理論が  
織り込まれていることにある。「セレンゲピティ」と  
いう言葉で表現されることもある「ひらめき」は、  
パズルの言うように、それを待ち受けて用意が  
なければ逃してしまうのだ。生徒たちは、まさに  
全身全霊でもって実験問題にチャレンジしていた。

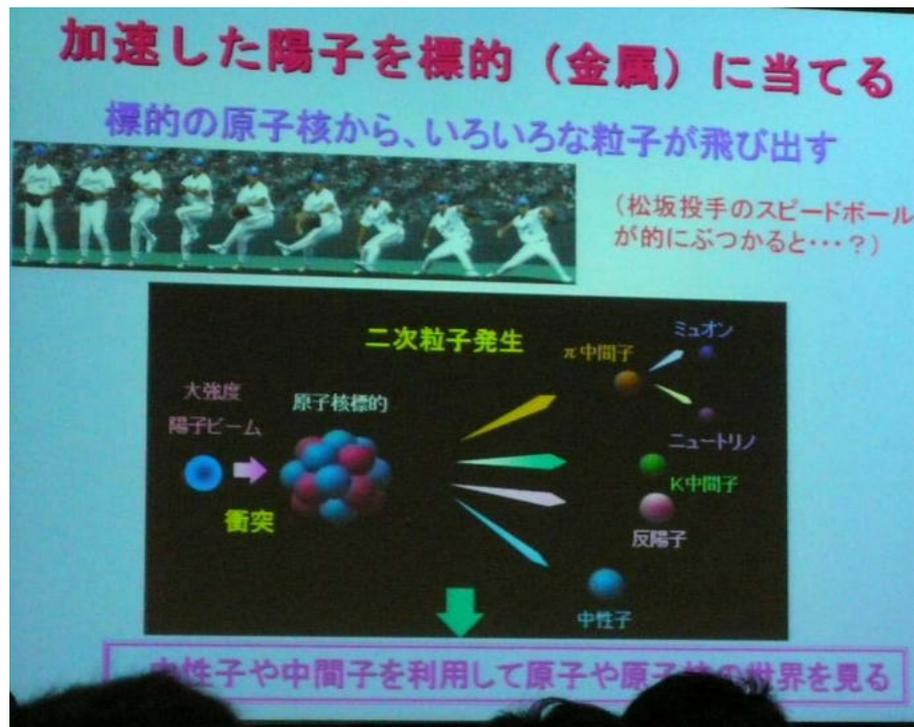
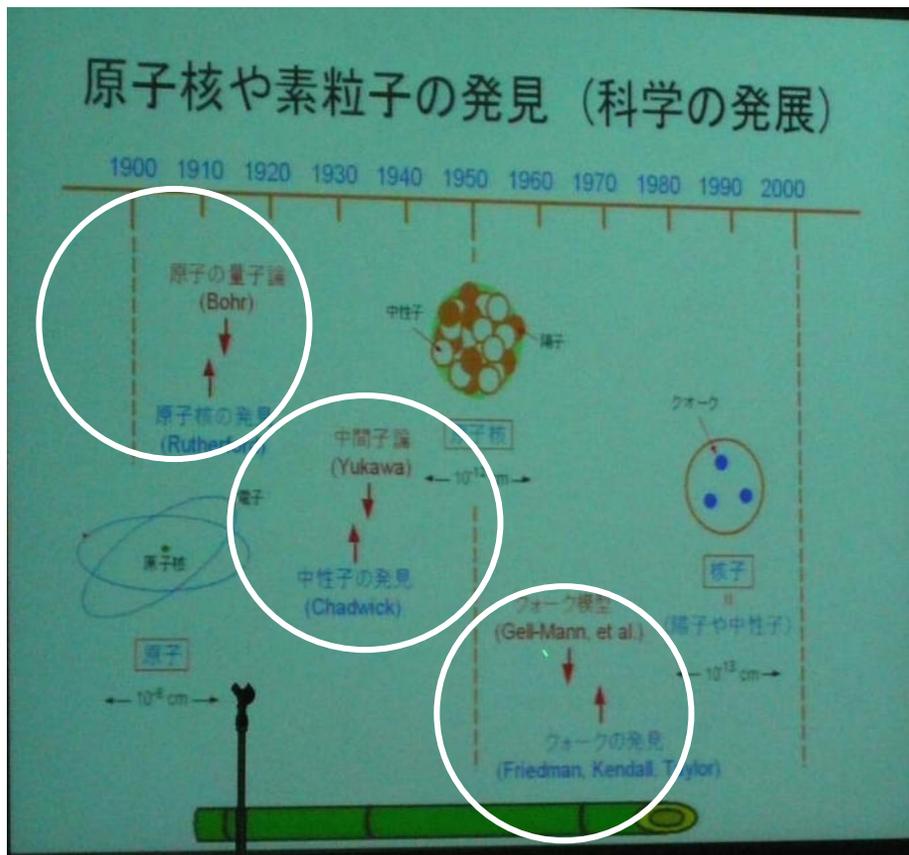




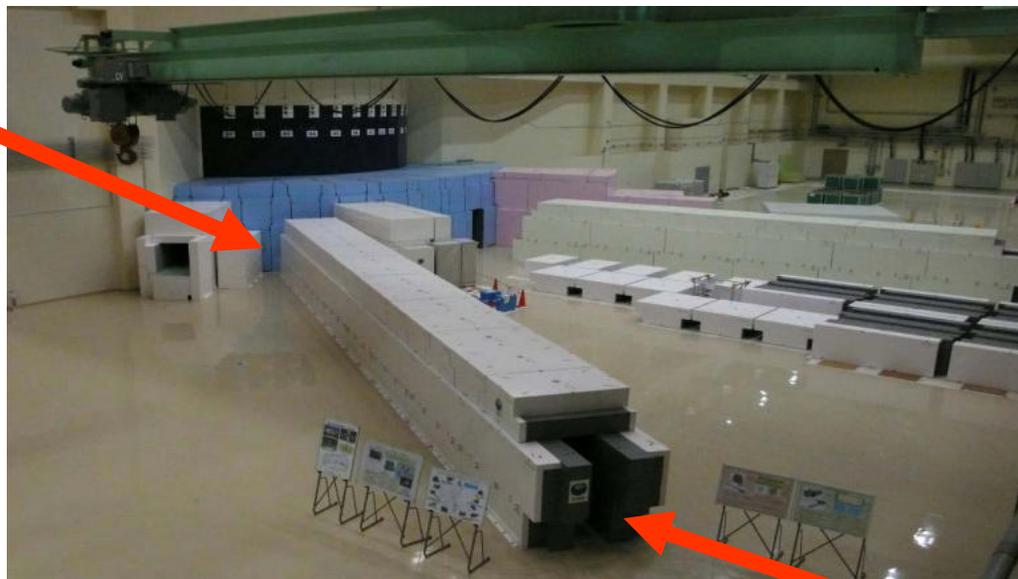
永宮J-PARCセンター長からは、原子核や素粒子の発見と理論は、不思議なことに、短期間の間に対のように続いて出てきているという話があった。



また、鈴木先生は比喻を上手にを使って、わかりやすく加速器の仕組みや研究の目的を説明した。鈴木先生は、研究所の訪問者に対するプレゼン技術のコンクールで優勝している達人。



# 巨大なコンクリートブロックの中性子ライン



現在建設途中の大強度陽子加速器施設J-PARC。稼働していれば内部まで見学することは難しいため、建設途中なのはむしろ幸이었다。

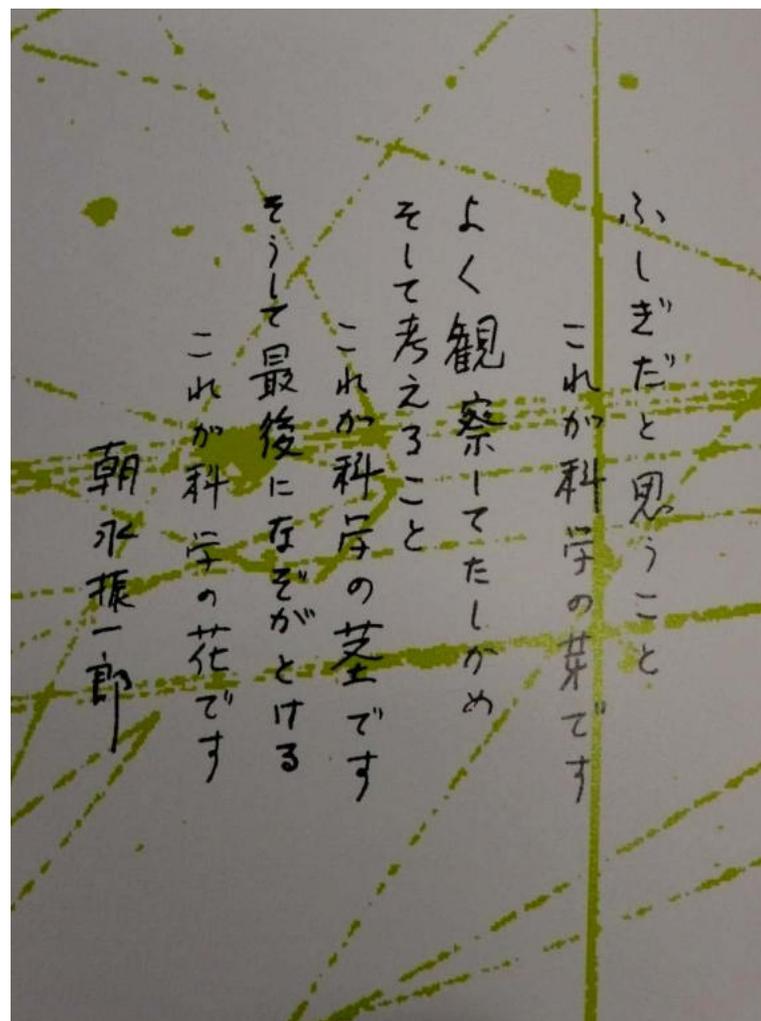


50GeVのシンクマロン。位置決め精度はなんと0.1ミリ。



# 朝永振一郎博士記念展示

*Dr. Sin-itiro Tomonaga*  
*Memorial Exhibition*



# 江崎玲於奈博士記念展示

*Dr. Leo Esaki Memorial Exhibition*



May 25, '07  
To Young People  
Pushing Your Faculties  
to the Limit: The Challenge  
Leo Esaki

# 白川英樹博士記念展示

*Dr. Hideki Shirakawa*  
*Memorial Exhibition*



人間は生まれながらに認知力や洞察力、好奇心や探究心などを持っていると私は思っています。しかし、持って生まれたこれらの能力は、磨きをかけなければ歳をとるにしたがって急速に退化してしまうでしょう。大学はこれらの能力に磨きをかける場であることを肝に銘じてください。



チャレンジが終わった生徒たちはすっかり疲れている・・・なんてことはありません。さしいれのス缶をほおばり、トランプに興じます。頭も体も育ち盛りの生徒たち。  
ほんとうに、おつかれさまでした！？





メダリストが決定して拍手をする先生たち。結果やいかに？



物理チャレンジは、教育に対する大人たちのチャレンジでもある。ここで蓄積されたノウハウやネットワークは今後の教育のモデルの基礎となってゆくはずだ。

# 取材陣が押し寄せた！



並木先生はプレス対応も手慣れたもの。

# IPh02007金メダリストにも取材



実験問題チャレンジで、生徒たちのチャレンジは終了。一同は食堂で昼食をとる。

昼食の間には、TVや新聞のインタビュー取材が行われた。チャレンジが終わっても、生徒たちには、別の緊張が待っていたわけだ。



# TVクルーは終日 私たちを追いかけた





**高所恐怖症ではカメラマンは務まりません。  
お世話さまでした！**



# 編集後記

昼食のときに、チャレンジャーたちの顔つきは、明らかにほっとした表情に変わっていた。精一杯チャレンジしたときの満足感と、張りつめていたものが抜けた空虚な心持ちが交錯していたのであろう。

手応えはどうだっただろうか。2度目の挑戦者たちは、頭一つ抜きん出ていただろう。そのように感じた周りのひとたちもいたかもしれない。考えてみれば、当然のことである。物理に一足早く興味を持ち、努力してきたのだから。裏返して言えば、悔しい想いをしたひとたちも、1年間、精進すれば、あの水準に達しうるということである。

7月11日、イランに出発する日本代表に対して、小柴昌俊先生は、次のような饒の言葉を贈られた。「君たちは、与えられた問題を解くことにかけては、すでに完璧である。しかし、敢えてここで、一つ苦言を呈しておきたい。それは、一流の研究者、技術者になるためには、受身の勉強だけではなく、**active learning (主体的な学習)**ができるようにならなければならない。それが、あなた方のこれからの課題である」と。

江崎玲於奈先生は、「自分の限界に挑戦しよう」と言われた。筑波大学の岩崎洋一学長は、朝永振一郎先生の「ふしぎだと思うことこれが科学の芽です・・・」を紹介された。白川英樹先生は「好奇心や探究心に磨きをかけなければ、歳をとるにしたがって急速に退化していく」と、学生を激励しています。

もう、お分かりでしょう。3人の先生は、表現はそれぞれ違うけれども、伝えたいことは同じであることを。

「物理チャレンジ第2ステージ」という短いけれど濃密な体験が、君たちの「学問に対するときの『姿勢』」の支えになっていくことを期待しています。



## 物理チャレンジ2007 ジャーナル

# レゾナンス 第4号(8月2日発行)

物理チャレンジ・オリンピック日本委員会  
広報委員会

# 表彰式



8月2日、閉会式を兼ねた表彰式が、開会式と同じく、つくば国際会議場で開催された。開会式の際には、緊張の面持ちだったチャレンジャーたちは、友人関係もできてすっかりリラックスモード。前夜には、話が弾んで、ほとんど一睡もしていない班も多かった。「物理チャレンジ」の目的の一つには、物理好きの友人をつくることにある。

# 主催者の挨拶



北原和夫物理チャレンジ・オリンピック日本委員会委員長

# 来賓のご挨拶



橋本昌茨城県知事



市原健一 つくば市長

# 問題解説と答案講評



常深博理論問題部会長



試験は5時間。  
採点に要する時間はさらに長い。



小牧研一郎実験問題部会長



二人の先生からの明快な解説により、2日間のチャレンジの記憶は、しっかりと脳裏に固定されたことだろう。



優良賞は14名に贈られた。賞状を手渡したのは、物理チャレンジ・オリンピック日本委員会の並木雅俊副委員長と二宮正夫副委員長。

# 物理チャレンジ2007委員長特別賞



物理チャレンジ・オリンピック日本委員会委員長特別賞は、最年少参加者(中学校3年)の村上さんに贈られた。

# 科学技術振興機構(JST)賞



科学技術振興機構賞は、女性のチャレンジャーのうち、優秀な成績を収めたひとに授与されるもので、行松泰宏理数学学習支援部長から3名に贈られた。

# 物理チャレンジ2007銅賞



物理チャレンジ2007銅賞は、12名に贈られた。

賞状を手渡したのは、美宅成樹日本生物物理学会会長(代理)、有光敏彦現地実行部会長。メダルを授与したのは、興治文子理論問題部会委員、長谷川修司派遣委員会副委員長。

なお、山田翔太さんは事情により表彰式を欠席した。

# 物理チャレンジ2007銀賞



物理チャレンジ2007銀賞は、12名に贈られた。

賞状を手渡したのは、鹿児島誠一日本物理学会副会長、高橋憲明日本物理教育学会副会長。

メダルを授与したのは、有光直子現地実行部会委員、新井一郎現地実行部会副会長。

# 物理チャレンジ2007金賞



物理チャレンジ2007金賞は、7名に贈られた。

賞状を手渡したのは、北原和夫物理チャレンジ・オリンピック委員会委員長。

メダルを授与したのは、有馬朗人物理チャレンジ・オリンピック委員会顧問会議議長。

# 有馬顧問会議議長からの挨拶



金メダルを授与した有馬朗人顧問会議議長(元東京大学総長)から、チャレンジ参加者に対して、激励の挨拶があった。物理学、生物学など科学にはまだまだ分からないことがたくさんある。また、地球環境保全も差し迫った問題である。君たちにその解決に取り組んでもらいたい、との熱のこもった挨拶に、聴衆は咳き一つすることなく聞き入っていた。

# 茨城県知事賞



理論問題と実験問題を合わせて最高得点をあげた村下君に、茨城県の橋本昌知事より、「茨城県知事賞」が贈られた。

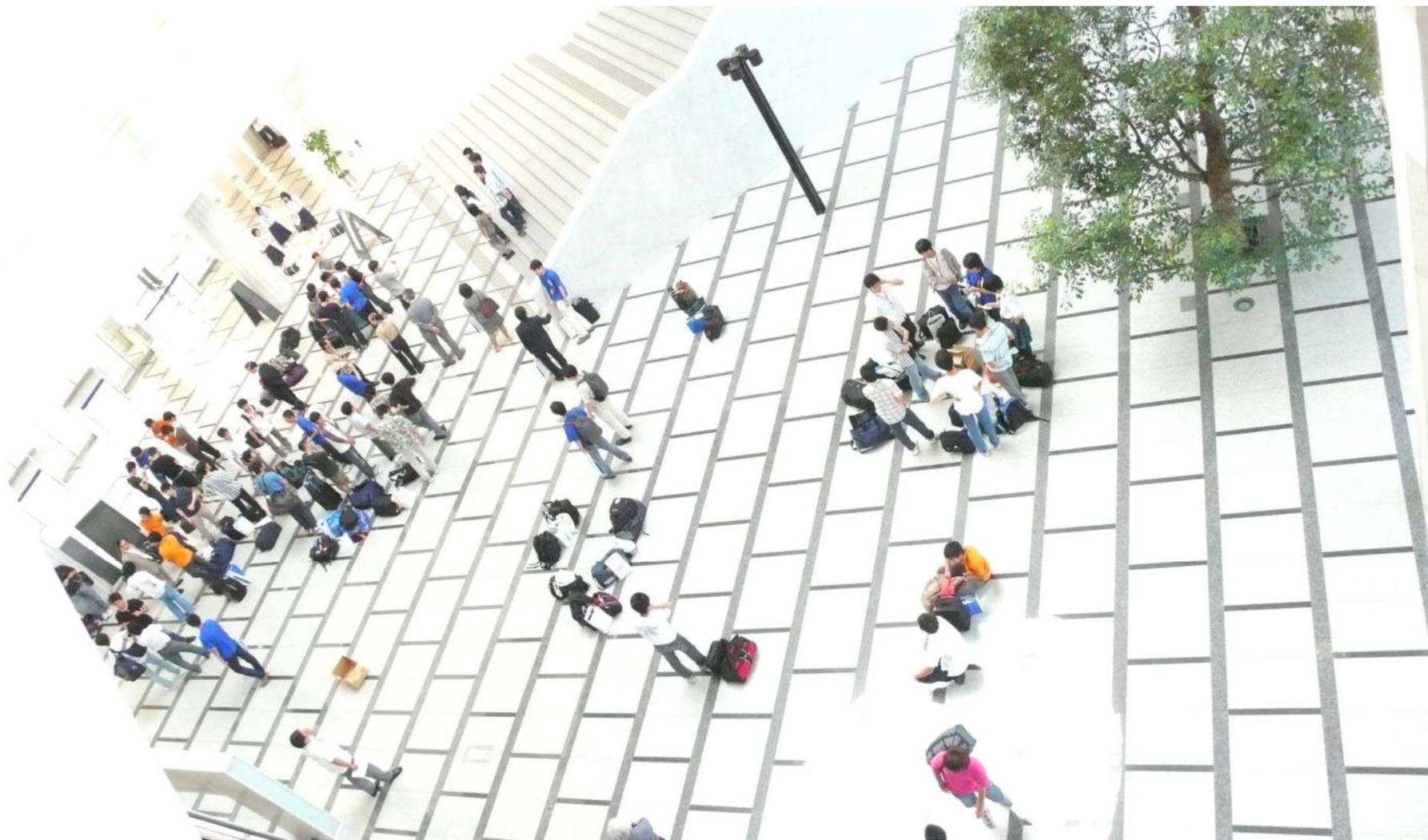
# 全体講評



表彰式のさいごに、有山正孝物理チャレンジ実行委員長から、全体を締め括る講評が行われた。

4日間にわたって、「トラマガ」を持って参加者を急かしてきていた、と皆なを笑わせた後、参加者全員の健闘を讃えつつ、物理チャレンジは単に試験を目的としたものではなく、先端科学を見る、第一線の研究者と語り合う、参加者相互のふれあいを大切しているものである。自分の採点では、ほぼその目的を達成できたものと思う。特に、J-PARCの見学は、運転が開始されてからでは内部を見ることは難しく、貴重な機会であったと考える、との話があった。

**「サイエンスツアー」を終えて「物理チャレンジ2007」は全日程を終了した。  
また来年、今度は岡山で！**



# 編集後記



科学オリンピックでは、開催期間中、毎日、Newsletterが発行、配布される。Iran-Isfahanの大会では「Symmetry」と題するニュースが発刊された(写真左。日本代表のフラッグを降りる光景が第1号の表紙を飾っている。)。オリンピックの形式に準ずることを旨とする物理チャレンジでも、4日間にわたり「レゾナンス(Resonance) = 共鳴」と称する日誌を会場・宿舎に掲示した。

即席のカメラマンと記者による「夜鍋仕事」で何とか間に合ったのは、デジカメ、パソコン、プリンターのおかげである。これらは、すべて応用物理の精華といえるだろう。

こうして、「物理チャレンジ」第2ステージは幕を閉じたが、チャレンジャーたちの物理の海への航海は始まったばかりである。次の目標をめざしての挑戦が続いていくことだろう。有馬先生が言われたように、何よりも健康に留意してがんばってほしい。